

原油市場展望

2023年2月



調査部 マクロ経済研究センター

<https://www.jri.co.jp/report/medium/oil/>

◆本資料は2023年2月1日時点で利用可能な情報をもとに作成しています。

◆ご照会先： 調査部 副主任研究員 松田健太郎 (Tel : 080-4176-4439 Mail : matsuda.kentaro@jri.co.jp)

◆日本総研・調査部の「経済・政策情報メールマガジン」は下記URLから登録できます（右側QRコードからもアクセスできます）。

新着レポートの概要のほか、最新の経済指標・イベントなどに対するコメントや研究員のコラムなどを随時お届け致します。

<https://www.jri.co.jp/company/business/research/mailmagazine/form/>

本資料は、情報提供を目的に作成されたものであり、何らかの取引を誘引することを目的としたものではありません。本資料は、作成日時点で弊社が一般に信頼出来ると思われる資料に基づいて作成されたものですが、情報の正確性・完全性を保証するものではありません。また、情報の内容は、経済情勢等の変化により変更されることがあります。本資料の情報に基づき起因してご閲覧者様及び第三者に損害が発生したとしても執筆者、執筆にあたっての取材先及び弊社は一切責任を負わないものとします。



原油価格見通し：80ドルを中心とした展開に

◆現状：80ドル前後へ上昇

1月のWTI原油先物価格は、月初に中国の経済指標の悪化や新型コロナの感染再拡大などからエネルギー需要減少の懸念が広がり、70ドル前半へ急落。

その後、①米国インフレ率の低下を受けたFRBの利上げ観測の後退、②ゼロコロナ政策解除後の中国景気の回復期待、③EUの対ロ制裁によるロシア産石油製品の供給減少への懸念などを背景に、下旬にかけて80ドル台乗せ。

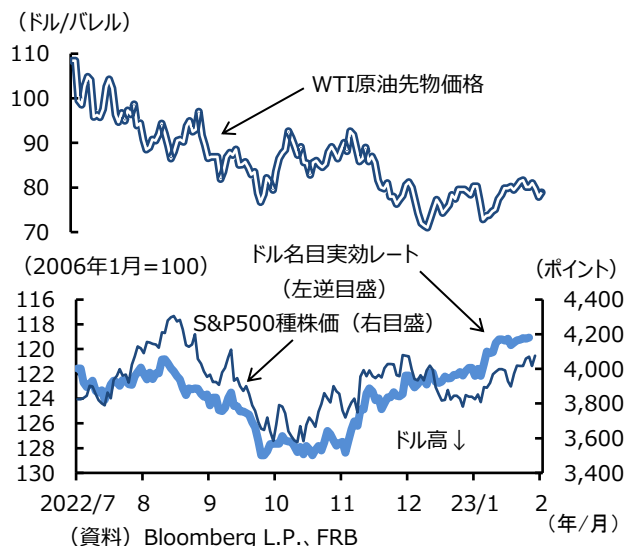
◆投機筋の買い越し幅は拡大

ゼロコロナ政策の撤廃に伴い中国经济の下振れリスクが低下したことなどを背景に、投機筋による原油先物の買い越し幅は拡大。総建玉は、2022年6月以来の水準へ増加。

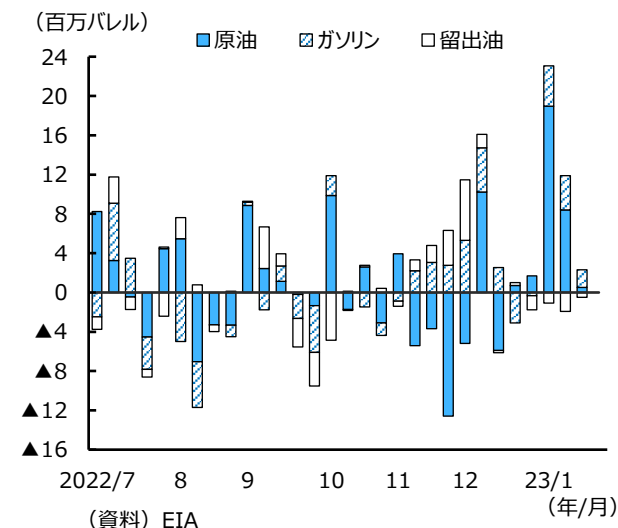
◆見通し：底堅い展開へ

先行きを展望すると、原油価格は振れを伴いながらも80ドル前後で推移する見通し。当面は、主要国の金融引き締めにより世界景気が減速するとの見方が強く、原油需要の減少が意識されやすい展開。ただし、①中国のゼロコロナ政策の撤廃、②OPECプラスの減産スタンスの継続、③米国の原油増産ペースの鈍化が、需給引き締め観測をもたらし、相場を下支えする見込み。

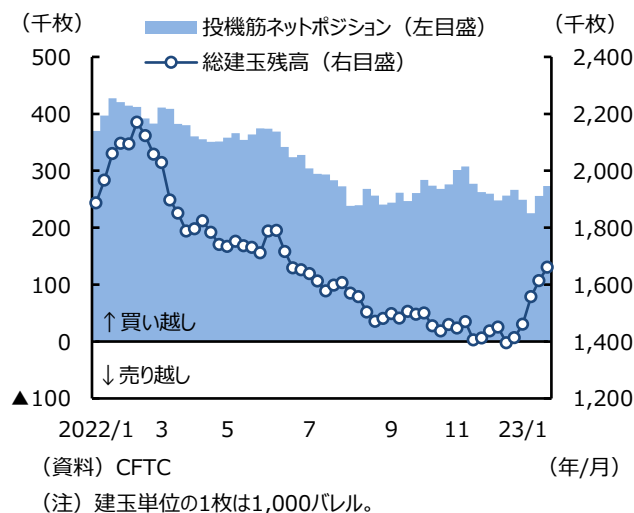
原油価格と株価・為替レート



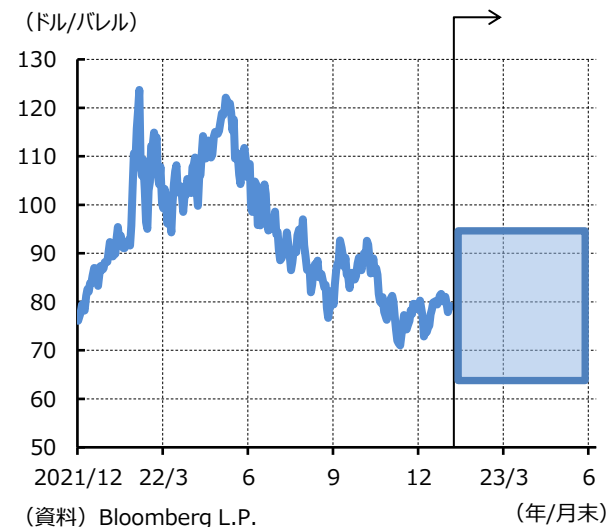
米国の原油・石油製品在庫 (前週差)



WTI原油先物ポジション



WTI原油先物価格見通し



トピック：増産が頭打ちとなる米国のシェールオイル

◆米原油生産は回復傾向が持続

米国では、原油生産が着実に回復。原油生産量は、コロナショック直後に大幅に落ち込んだ後、回復傾向が続き、2022年平均では1,200万バレル弱と2019年平均の9割超の水準まで増加。

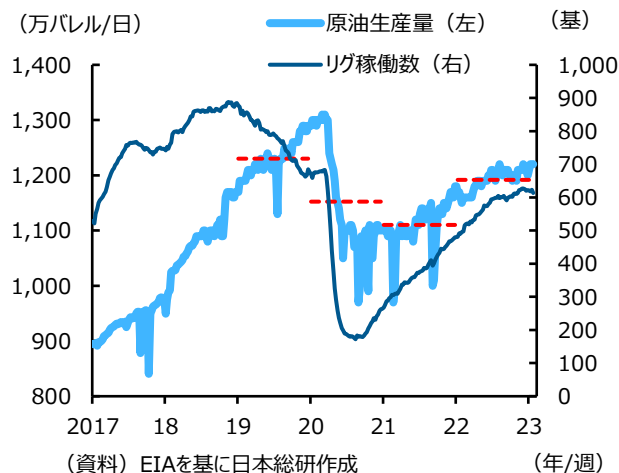
◆コスト増加や人手不足などが増産の足枷に

もっとも、先行きの米国原油生産の増加ペースは鈍化する見込み。原油生産の先行指標となる石油リグの稼働数が、2022年秋以降、600基前半で頭打ち。この背景として次の2点が指摘可能。

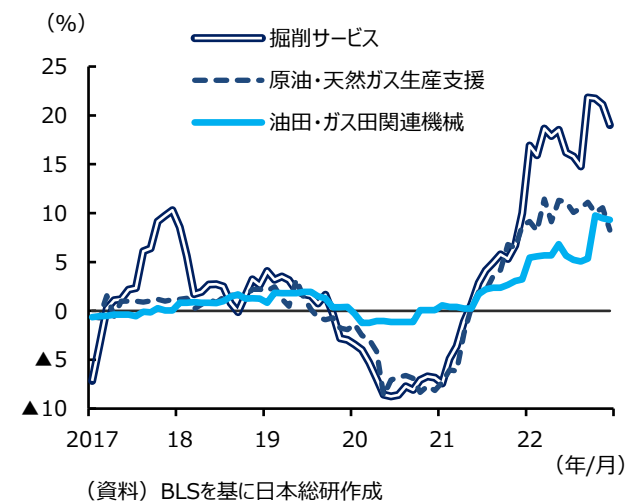
第1に、コストの増大。米シェール企業の投入コストを生産者物価指数で見ると、2017年以降の増産局面と比較しても値上がりが見られる。掘削サービスで10%超の伸びが続いているほか、掘削に用いる機械も10%弱で高止まり。こうしたコスト増の結果、シェール企業が設備投資をして大幅増産するのに採算が合う原油価格は、現行水準の80ドル前後を大きく上回る状況。

第2に、開発サポート事業の供給制約。探査や測量など石油・ガス採掘をサポートする企業では、労働需給がひっ迫。企業は労働時間を増やして対応しているものの、雇用者数の不足分を補えず。人手不足は、賃金の上昇を通じたコスト増に加えて、石油・ガス生産の制約要因に。

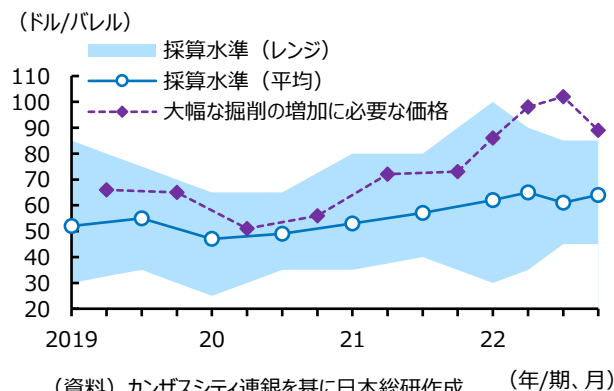
米国の原油生産量と石油リグの稼働数



米国の原油関連の生産者物価指数（前年比）



米エネルギー企業の採算水準



石油・ガス関連の雇用動向

